



Title	デンマーク語の副詞også/hellerの心態詞的用法について
Author(s)	大辺, 理恵
Citation	IDUN - 北欧研究 -. 2017, 22, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の副詞 *også* / *heller* の 心態詞的用法について

大辺理恵

1. はじめに

IDUN21 号の拙稿「デンマーク語心態詞の研究 I. デンマーク語心態詞：概説」では、デンマーク語の心態詞と呼ばれる一連の副詞について取り上げたが、本稿ではその際に扱わなかった *også* そしてその否定文における形式である *heller* に焦点を当てたい。¹

også / *heller* は、デンマーク語の初級段階で習得される語彙の 1 つと言える。それは *også* に「～もまた」という意味が存在し、否定文では *heller* によって同義が表され、使用頻度が非常に多いことが理由の 1 つであろう。

(1) Gunnar taler tysk, og han taler også² fransk.³ (Fischer-Hansen & Kledal: 189)

<Gunnar はドイツ語を話す、そして彼はフランス語もまた話す>

(2) Per taler ikke tysk, og han taler heller ikke fransk. (Fischer-Hansen & Kledal: 189)

<Per はドイツ語を話さない、そして彼はフランス語もまた話さない>

しかしながら、以下の Andersen (1982) の例が示すように *også* / *heller* には「～もまた」と訳すことができないような用法も存在する。⁴

(3) A: Jeg har fået dårlig mave af det.

B: Det er også usundt at spise sådan noget. (Andersen: 92)

A: <私はそのせいでお腹を壊しました>

B: <? そんなものを食べることもまた不健康です>

(4) A: Jeg har fået dårlig mave af det.

¹ これは、*også* は否定文で用いられることはない、という意味であり、*også* が *ikke* と共起しない、という意味ではない。*ikke* が文の命題内容に含まれるような否定の副詞としてではなく、聞き手に対して命題内容の確認を求めるような叙法の副詞として用いられる場合は、*ikke* と *også* は共起し得る。間瀬 (1988: 39) によれば、その場合に *også* は、*ikke* が否定の副詞ではなく、付加疑問的な *ikke*、つまり叙法の副詞としての *ikke* であることを示すという。

(a) Bor din søster *ikke* i Århus? / Bor din søster *ikke også* i Århus? / Din søster bor i Århus, *ikke*? / Din søster bor i Århus, *ikke også*? <お姉さんはオーフースに住んでいるんでしょう・住んでいるんじゃないですか> (間瀬: 36)

² 以下、例文内における *også* 及び *heller* の下線・太字は筆者による。

³ *også* は中域副詞の位置に置かれることが一般的であるが、「～もまた」という意味では、それがかかる名詞の直前に置くこともできる。

(b) Min mand er sur på dig. Også jeg er sur. (Fischer-Hansen & Kledal: 189)

<私の夫はあなたに怒っている。私も怒っている>

⁴ *også* / *heller* におけるこの用法については、新谷・間瀬 (2003)、デンマーク語独習コンテンツ・語彙集 (2009)、新谷・Pedersen・大辺 (2014) では既に明記されている。

B: Det er heller ikke sundt at spise sådan noget. (Andersen: 92)

A: <私はそのせいでお腹を壊しました>

B: <?そんなものを食べることもまた体に良くありません>

Andersen (1982) は (3)・(4) にある *også* / *heller* を心態詞であると指摘している。Andersen (1982) の説明はのちに詳述するとして、本稿ではこの「～もまた」という意味ではない *også* / *heller* の意味・用法について着目したい。

本稿ではまず Andersen (1982) による *også* / *heller* における心態詞的用法の説明を概観し、次に Andersen (1982) 以外の文献に言及する。さらに *Ordbog over det danske sprog* (以下 ODS) そして *Den Danske Ordbog* (以下 DDO) における *også* / *heller* の心態詞的用法に関連する記述について、例文を確認しながら概観する。これらの点を踏まえ、*også* / *heller* の心態詞的用法について、筆者が収集した実例をもとにデンマーク語研究者たちとその機能について話し合った結果得られた様々な視点からの考察を述べることとする。

2. 副詞 *også* / *heller* の心態詞的用法に関する先行研究

2.1. Andersen (1982)

Andersen (1982) によれば、「*også* / *heller* は、(A の発話の命題内容について) B がその正当性を認めるというシグナルを送る」⁵ という。さらには、「肯定文の *også*、否定文の *heller* は、先行する発話の命題内容が、応答する発話の命題内容から見ると理解できることであり、応答する発話の命題内容が、先行する発話の命題内容に対するある種の説明として発話されているというシグナルを送る」とある。⁶ したがって (3)・(4) の B の発話に相応しい日本語訳を当てはめると以下のようなになるであろうか。

(3) A: Jeg har fået dårlig mave af det.

B: Det er også usundt at spise sådan noget. (Andersen: 92)

A: <私はそのせいでお腹を壊しました>

B: <そんなものを食べることは、実際/本当、不健康ですからね>

(4) A: Jeg har fået dårlig mave af det.

B: Det er heller ikke sundt at spise sådan noget. (Andersen: 92)

A: <私はそのせいでお腹を壊しました>

B: <そんなものを食べることは、実際/本当、体に良くありませんからね>⁷

⁵ (….) signalerer *også*– eller dets distributionelle variant *heller*– en bekræftelse. (Andersen: 91)

⁶ *Også* i en positiv og *heller* i en negativ sætning signalerer, at p er forståelig i betragtning af q, idet q fremføres som en slags forklaring på p. (Andersen: 92)

⁷ 本稿では心態詞としての *også* / *heller* の訳語として「実際」と「本当」を用いた。飛田・浅田 (1994) によれば、日本語の「実際」には「述語にかかる修飾語として用いられた場合には、

(3) では、B は *også* を用いることで、A の発話における命題内容 (= 「A がお腹を壊したこと」) についてその正当性を認め、さらにその命題内容は、B の発話における命題内容 (= 「そんなものを食べるのは不健康であること」) に照らし合わせると理解できることであり、A の発話における命題内容に対する説明となり得ると A に伝えている。⁸

2.2. Jensen (2000)

Jensen (2000) は、様々な副詞における通時的な意味の変化とそれに付随する形態的・統語的变化に着目した論文であるが、*også* についてはごく簡単に次のように触れられている：「普段であれば命題のレベルにおいて1つの文構成素を指し示す際に使われる焦点化詞として用いられる数量詞が、文副詞の位置に置かれている場合、文全体に作用をすること、または抽象的で主観的な意味を獲得することがあり得る」。⁹ その直後に Andersen (1982) の例 (3) を示している。これは Jensen (2000) も *også* における心態詞的用法の存在を示唆しているものと考えられる。しかしその否定文における形式である *heller* への言及はない。

現実に照らした話者の納得を暗示する」機能があり、また「本当」には「事実や理想に合致している様子を表す」機能があるという。ただし新谷・間瀬 (2003)、デンマーク語独習コンテンツ・語彙集 (2009)、新谷・Pedersen・大辺 (2014) では、「確かに」という訳語も用いられている。しかしながら、デンマーク語の心態詞を訳出すると、日本語として不自然な文になる場合が多いことも事実であり、必ずしも訳出すること自体が適切であるとは限らない。

⁸ また Andersen (1982: 92) では、*da, nu, ellers, altså* などと *også / heller* が異なる点として、以下に示すように、A と B の命題内容の交代が可能であることが指摘されている。

(c) A: Ih hvor er du dog forpustet. <まああなたはなんて息を切らしているんでしょう!>

B: Jeg har også løbet hele vejen. <実際、ずっと走ってきましたからね>

(d) A: Jeg har løbet hele vejen. <私はずっと走ってきました>

B: Du er sørme også forpustet. <実際、あなたは本当に息を切らしていますね>

(e) A: Jeg tror ikke jeg tager med til festen. <パーティには行かないでおこうと思うんだ>

B: Den bliver vist heller ikke særlig sjov. <実際、それは特に面白くはないようです>

(f) A: Festen bliver vist ikke særlig sjov. <パーティは特に面白くはないようです>

B: Jeg tror heller ikke jeg tager med til den. <実際、それには行かないでおこうと思うんだ>

ただし、例文 (4) でこの操作をする場合には、(h)にあるように B の応答文が肯定文になることから、*heller* を *også* にする必要がある。

(g) A: Jeg har fået dårlig mave af det.

B: Det er heller ikke sundt at spise sådan noget.

(h) A: Det er ikke sundt at spise sådan noget.

B: Jeg har også fået dårlig mave af det.

⁹ Kvantorer, som *ellers* bruges som fokusoperatorer ved udpegelsen af enkelt led på propositionelt niveau, kan på SA dels have rækkevidde over hele sætningen, dels opnå en abstrakt og subjektiv betydning. (Jensen 2000: 196)

2.3. Christensen (2006)

Christensen (2006) では、også は相手の見解と意見の一致があるというシグナルを送る心態詞として扱われている。¹⁰ しかしその否定文における形式の heller については触れられていない。以下の例を見てみよう。

(5) A: Line og Thomas er stadig ikke kommet.

B: De er også på cykel i dag. (Christiansen: 140)

A: <Line と Thomas はまだ到着していません>

B: <彼らは実際、今日自転車ですからね>

Christensen (2006:140) の説明では、A の発話における命題内容 (= 「Line と Thomas がまだ到着していない」) と、B の発話における命題内容 (= 「彼らが今日は自転車で移動している」) の間に意見の一致 (overensstemmelse) がある、と指摘されている。¹¹ (5) において også は、まずは A の発話における命題内容の正当性を認め同意すること、さらに B 自身による発話の命題内容が、A の発話における命題内容に対する説明となり得ることを示すと考えられる。

また Christensen (2006: 140-141) では、også を心態詞として altså, så, ellers とともに 1 つのグループとして扱っているが、それは også, altså, så, ellers が持つより具体的な機能、「それらが含まれる文と先行する文との間に関連があることを示す機能」に起因するようだ。¹² 加えてこのグループのうち、altså, så, ellers が感情を強調するために用いられるのに対し、¹³ også にはそのような用法があるかについては確信が持てないとされている。¹⁴

¹⁰ Christensen (2006: 134).

¹¹ Christensen (2006:137-138) では、også が A と B の間に「意見の一致」があることを表すのに対し、ellers は A と B の間に「意見の不一致」があることを表すという指摘もある。

(i) A: Line og Thomas er stadig ikke kommet.

B: De er ellers på cykel i dag. <彼らは今日自転車なんですけどね (おかしいなあ)>

¹² いわゆる接続副詞に近いこの機能をより抽象的なレベルで記述すると「argumentativ な (: 繋がりがある / ひとまとまりであることを示すような) 機能を有するということらしい。この argumentativ は、辞書に則った訳語を当てはめるのであれば、「論拠を含む」または「論拠に基づいた」という意味になるが、ここではより限定された文脈で用いられており、訳語としては少々長くなるが、「繋がりがある / ひとまとまりであることを示す」とした。

¹³ 以下に当該箇所であげられている例文を示す。

(j) Det er altså for usselt. <それはほんとうに情けなさすぎる>

(k) (årh) kan du så holde mund <(あーもう) 黙ってよ>

(l) Det var ellers noget af et styrt! <それはなんとまあすごい墜落だこと!>

¹⁴ Jeg er ikke sikker på at også på lignende vis kan bruges emphatisk og emotivt, (…). (Christensen: 141)

2.4. GDS (2011)

大辺・新谷・Pauldan-Müller (2015) において主要な参考文献とした GDS であるが, også については文副詞としても, 心態詞としても取り上げられていない。alså についての言及があるのは, 焦点化詞 (fokuspartikler) に関する箇所においてのみである。¹⁵ 焦点化詞としての også の用法は, 本稿の冒頭で言及した「～もまた」と訳することができるようなものである。また heller については文副詞としても心態詞としても, さらに焦点化詞としても, その用法についての言及はない。

2.5. まとめ

以上, også / heller の心態詞としての用法については, Andersen (1982) のみはその両方を扱っており, 現段階では現代デンマーク語における også / heller の心態詞的用法について十分な記述がなされているとは言い難い。¹⁶ しかし Andersen (1982) 及び Christensen (2006) の記述を総合すると, også / heller の心態詞的用法としては, 以下のようにまとめることができると思われる。

用法① 先行する発話を受けて, それに応答する発話内で話し手が先行する命題内容の正当性について認め同意を示す

用法② 応答する発話の命題内容が, 先行する発話の命題内容に対する理由・説明として機能することを示す

ただし用法②については当然, 先行する発話の命題内容が真であることが前提として含まれると考えられる。故に, også / heller において用法②が確認される場合には, 自動的に用法①も確認されるのではないかと考えられる。また, 用法①が確認される場合であっても, 必ずしも用法②も確認されるとは限らないのではないかという疑問も生じる。さらに Christensen (2006) が疑問を呈している også の感情表出の機能についても確認が必要である。これらの点について, 以下 ODS そして DDO による også / heller の記述を精査する中で確認することとしたい。

¹⁵ Hansen & Heltoft (2011: 1073-1075).

¹⁶ しかしながら, 筆者が 2016 年夏にデンマークにて Jensen (2000) の著者である Eva Skafte Jensen 氏 (デンマーク国語審議会・上級研究員), Christensen (2006) の著者である Tanya Karoli Christensen 氏 (コペンハーゲン大学・准教授), 及び GDS の著者である Lars Heltoft 氏 (ロスキレ大学・教授) に直接確認をした限り, 3 者ともに også / heller の心態詞としての用法の存在を認めており, 特に GDS における記述には改善する余地があると述べていたことをここに付け加えておく。

3. ODS そして DDO における også / heller の記述¹⁷

3.1. også：会話形態の例を中心に

3.1.1. også が用法①と用法②を兼ねている場合

ODS の説明《3.2.》には【何かについての自然な、必然的な原因あるいは説明（釈明）として何かを示す】とある。¹⁸

(6) ”men Goelan? Det veed jeg ikke Hvad betyder.” – ”Det er ogsaa et Provindsialord.” (ODS)¹⁹

〈「しかし Goelan ですか？それが何を意味するのか、私には分かりません」 – 「それは実際、田舎っぽい言葉ですからね」〉

先行する発話の命題内容：「話し手が Goelan の意味を理解できない」

応答する発話の命題内容：「Goelan は田舎っぽい言葉である」

(6) では、応答する発話の命題内容は、先行する発話の命題内容への【自然な、必然的な原因あるいは説明（釈明）】として解釈できる。説明《3.2.》には直接的な言及はないが、(6) では også が含まれる発話において、先行する発話の命題内容の正当性を認め同意していることは明らかである。

一方、DDO の説明《2.a.》には【何かについての自然な説明または釈明を示すのに使われる】とある。²⁰ これはほぼ ODS の説明《3.2.》と同じである。

(7) folk får sværere og sværere ved at stave. – Jamen, det må også være svært, ikke? (DDO)

〈人々は正しく綴ることにますます困難を覚えています – はいしかし実際、正しく綴ることが難しいことには違いありませんよね？〉

先行する発話の命題内容

：「人々が正しく綴ることにますます困難を覚えている」

応答する発話の命題内容：「正しく綴ることは難しい」

(7) でも応答する発話の命題内容は、先行する発話の命題内容についての【自然な説明または釈明】として解釈できる。また DDO の説明《2.a.》には直接的な言及はないが、(7) でも også が含まれる発話において、先行する発話の命題内容

¹⁷ 以下、用法①と用法②は、本稿 2.5. にある også / heller の心態詞的用法の部分を目指す。

¹⁸ angivende noget som den naturlige, selvfølgelige årsag til ell. forklaring paa (undskyldning for) noget (ODS: ogsaa, 3.2.)

¹⁹ 以下、説明の便宜上、ODS からの例文には例文末に(ODS)を、DDO からの例文には(DDO)と記す。また説明上必要となる命題内容についても、訳文の直後にまとめて記すこととする。

²⁰ bruges til at angive den naturlige forklaring på eller undskyldning for noget (DDO: også, 2.a.)

の正当性を一旦は認め同意していることは明らかである。²¹

以上、også が会話内で使用されている場合に用法②が存在するなら、そこには用法①も存在することが確認できるであろう。

3.1.2. også が用法①のみを有する場合

ODS の説明《5. / 5.1.》には【想像している、期待している、望んでいる、あるいは主張されていることと現実、真実が合致することを示す】²² とある。

(8) ”der sagde de at du var arresteret …” – ”Jeg skal ogsaa arresteres – jeg er paa Vej derhen nu.” (ODS)

〈「そこでは彼らがあなたは逮捕されたと言っていましたか…」 – 「私は実際、逮捕されることになっています。私は今そこへ行く途中です」〉

先行する発話の命題内容：「彼らが、あなたは逮捕されたと言っていた」

応答する発話の命題内容：「私は逮捕される」

説明《5. / 5.1.》の記述に沿って考えるなら、(8)において【想像している、期待している、望んでいる、あるいは主張されていること】に相当するのは、先行する発話の命題内容であり、【現実、真実】が応答する発話の命題内容である。そしてその2点の間に一致があることを også は示すのだから、これは også の用法①と考えることができそうである。しかしその両者の間には、(6)・(7) で見たような説明の側面は見られない。したがって (8) における også は用法①のみを有すると考えられる。

また ODS の説明《5.2.》には【(話し言葉) 第三者の発言において、その人物に同意することを示す】²³ とある。

(9) ”du har baaret dig dumt ad.” – ”ja, det har jeg ogsaa”.

〈「あなたはばばかな振舞いをしました」 – 「ええ、実際/本当そうですね」〉

(10) ”bliv nu, Deres Kaffe bliver jo kold.” – ”Ja det er ogsaa sandt.”

〈「ここにいなさい、貴方のコーヒーが冷めてしまいますから」 – 「ええ、実際/本当その通りですね」〉

(9)・(10)においても、også が含まれる発話は、単純に先行する発話の命題内容

²¹ 岩崎 (1990: 80) では、これと類似するドイツ語 auch の心態詞的用法が指摘されている：「III. ⑧ [先行する発話や場面を受け、その陳述内容の理由づけとなる背景を説明しようとする話し手の気持ちを反映して、文中でのアクセントなし]」。

(m) Das Essen war ausgezeichnet. – Es war *auch* die teuerste Speise, die es in diesem Hotel gibt.
〈食事は、すばらしくおいしかった—このホテルでいちばん高価な料理だったからね〉

²² betegnende overensstemmelse mellem hvad man forestiller sig, venter sig, ønsker, ell. hvad der paastaas olgn., og virkeligheden, sandheden (ODS: ogsaa, 5.)

²³ (talespr.) som udtryk for at man er enig med en anden person i hans udtalelser. (ODS: ogsaa, 5.2.)

が正しいと認め同意することを示しているだけだと考えられる。²⁴

一方、DDO の説明《4.a》には【誰かに同意していること、または正しい文脈がある者によって理解されていることを表すために使われる】²⁵ とある。

(11) Du lovede, jeg måtte se det kort fra Gerda. – Ja, det er også sandt.

<あなたは、私が Gerda からのカードを見てもいいと、約束しました – はい、実際／本当その通りですね>

(11) も (9)・(10) と同様 også は用法①のみを有すると考えられる。²⁶

以上(8)–(11) から、også の用法①が観察される場合であっても、必ずしも用法②が観察されるとは限らず、用法①が単独で生じる場合があることが分かる。

3.2. også : 会話形態以外の例を中心に

3.1. では会話形態の例で用いられる også のみを扱ったが、ODS の説明《3.2.》及び DDO の説明《2.a》には会話として示されていない例文もある。

(12) jeg var … ganske nær ved at slumre ind. Men det var ogsaa saa grumme varmt. (ODS)

<私は本当に眠りに落ちてしまうところだった。しかし実際、それほどまでにとんでもなく暑かったのだ>

先行する文の命題内容 : 「私は眠りに落ちてしまうところだった」

後続する文の命題内容 : 「とんでもなく暑かった」

(13) Hans appetit er ikke så stor for tiden, men han er også temmelig forkølet. (DDO)

<彼の食欲はこのところそれほど大きくありません、でも彼は実際、かなり風邪をひいています>

先行する文の命題内容 : 「彼の食欲はこのところそれほど大きくない」

後続する文の命題内容 : 「彼はかなり風邪をひいている」

まず også の用法①に関しては、(12)・(13) は会話ではないため「先行する発話の命題内容の正当性を認め同意すること」を伝える相手が存在しない。しかし各例における先行する文と後続する文の関係を見てみると、後続する文の命題内容が、先行する文の命題内容の説明として機能することが指摘できる。したがっ

²⁴ また ODS では例文 (10) の直前に、det er ogsaa sandt という言い回しが、「あなたの意見が正しいです」「そう、そのとおりです」という意味で使われることも指摘されている。

²⁵ bruges til at udtrykke at man er enig med nogen, eller at den rette sammenhæng er gået op for en (DDO: også, 4.a.)

²⁶ 岩崎 (1990: 72) では、この心態詞的用法①については、ドイツ語 auch の心態詞としての記述ではなく、語法詞の記述の一部として次のように紹介されている：「II. ② [先行する発話を受け、その陳述内容との対応・一致を示して] 事実また、はたして、実際に。」

(n) Du siehst ja so traurig aus. – Ich bin es auch. <きみは、ばかに悲しそうじゃないかー事実そうなんだよ>

て (12)・(13) における også は、用法②に酷似していると言える。

次に ODS の説明《5. / 5.1.》においても会話ではない例文が挙げられている。

(14) Midt inde brændte en Ild, saa man kunde stege en Hjort derved, og det blev der ogsaa. (ODS)

<(洞穴の) 真ん中に焚き火が燃えていた、だからその側で鹿を焼くことができた、そして実際、焼かれた>

先行する文の命題内容 : 「その(焚き火の)側で鹿を焼くことができた」

後続する文の命題内容 : 「鹿は焼かれた」

(14) も会話ではないので、「先行する発話の命題内容の正当性を認め同意すること」を伝える相手が存在せず、også の用法①は確認できない。しかし (14) を ODS の説明《5. / 5.1.》に沿って解釈するなら、【主張されていること】に相当するのが先行する文の命題内容、そして【現実, 真実】に相当するのが後続する文の命題内容となり、その間に一致があるということであろう。したがって (14) における også は、用法①に非常に近接していると言える。

さらに DDO の説明《4.》【2つの状況に一致があることを示すために使われる、例えば思っていることや述べていることと、その時点での現実がどのようなかということについて(の一致)】²⁷ においても、会話ではない例文が見られる。

(15) Jeg gik i biografen med Asger fra min pærelleklasse. Muski blev meget jaloux, og det var også meningen. (DDO)

<私は Asger と一緒に映画館に行った。Muski はとても嫉妬した、実際、それが狙いだったのだ>

先行する文の命題内容 : 「Muski はとても嫉妬した」

後続する文の命題内容 : 「それが狙いだった」

(15) について説明《4.》に沿って考えるなら、【思っていることや述べていること】が先行する文の命題内容に相当し、【その時点で現実がどのようなかということ】が後続する文の命題内容に相当し、その2つの事柄に一致があることになる。したがってここでも også の機能は用法①に非常に近接していると言えるのではないだろうか。

(12)–(15) は会話ではないので、話し手と受け手という関係が存在しない。したがって本来であれば心態詞的用法に関しては、3.1.に挙げた例を参考にすべきだろう。しかし3.2.で言及した例は、også の心態詞的用法が発生してきた過程を辿るには興味深い例であると思われる。本来の副詞としての også は、命題部分の

²⁷ bruges til at udtrykke at der er overensstemmelse mellem to forhold, fx mellem hvad man tror eller siger, og hvordan virkeligheden er på det punkt (DDO: også, 4.)

一部分を指し示す焦点化詞の用法とは別に、Christensen (2006) も指摘しているように、先行する文と *også* が含まれる文との間に関連性があることを示す、いわば接続副詞の用法を有する。故に *også* が心態詞的用法を獲得する過程として、会話環境以外で、*også* が持つ本来の副詞としての用法にも、そして心態詞的な用法にも近接する例が観察されたとしても不思議ではないと思われる。

3.3. 感嘆表現に現れる *også* について

ここでは、*også* の心態詞的用法として、*altså* や *ellers* に見られるような感情表出の用法が存在するかどうかについて見ていきたい。²⁸ ODS の説明《6.》には【(話し言葉) 意味の弱化を伴って、特に(遺憾、驚きなどの表出としての) 感嘆表現において】²⁹ とある。

(16) "Undskyld mig et Øjeblik ... Jeg skulde blot sige hende to Ord!" – Gerhard saa' efter ham: Hvor disse Købmænd **ogsaa** har travlt. (ODS)

<「ちょっとすみません…彼女に二言だけ言わないと」 – Gerhard は彼を目で追った：食料雑貨商というのは、本当、まあなんと忙しいんだ>

(16) では、最初の食料雑貨商による発話から Gerhard が「食料雑貨商は忙しい人たちだ」という陳述に至っている。また (16) では *også* が含まれる文自体が既に感嘆文であることから、*også* の存在なしにも「感嘆」を表していると言えるかもしれない。³⁰ そこで *også* の役割についてであるが、ODS では《6.》に続く説明の1つに【何かが予想通りに運んだこと、何かが通常通りであると判明すること、何かが暗示的に一般に知れ渡っている又は認められていること等を表す】³¹ とある。

このより詳細な説明を踏まえると、(16) の *også* は次のように解釈できるかもしれない：Gerhard は従来から食料雑貨商は忙しい人たちだと思っていて／聞かされていて、その内容が目の前の食料雑貨商が行なった行為・発話によって実証されたために、感嘆文に *også* が含まれている。この場合は実際に行われた行為と Gerhard が従来思っていた／聞いていたこととの間に「一致」が見られるという点で、*også* の用法①に近接しているとも考えられる。

²⁸ 本稿では「感嘆表現」を話し手の主観的な感情を表している表現とし、「感嘆文」を話し手の主観的な感情を表す形式を有する文とする。

²⁹ (talespr.) m. afbleget bet., især i udraab (som udtryk for ærgrelse, forbavelse olgn.) (ODS: ogsaa, 6.)

³⁰ 岩崎 (1990: 78) ではドイツ語 *auch* の心態詞としての用法の記述に以下のような説明がある：III. ⑤ 「独立した副文形式の感嘆文に用いられ、話し手の肯定的ないし否定的な驚きの気持ちを反映して、文中でのアクセントなし」。

(o) Was er *auch* alles weiß! <彼も、ずいぶんいろんなことを知っているんだなあ>

³¹ dels som udtryk for, at noget er gaaet, som man kunde have ventet sig, at noget viser sig at være, som det plejer, ell. antydende at noget er alm. kendt ell. erkendt olgn. (ODS: ogsaa, 6.)

(17) ”Jeg har noget til Børnene …” – ”De tænker ogsaa altid paa andre,” sagde Frøken Roed.

〈「子供たちに渡すものがあるんだ…」 – 「あなたは、本当、いつも他の人たちのことをお考えになるのですね」と Roed さんは言った〉

(17) は (16) とは異なり、文の形式から感嘆表現であることは判断できないが、også が使われている理由については、(16)と同様の解釈が成り立ちそうである：Roed は常々 jeg / De で示されている人物が他人に配慮する人物であると思っており、そのことがその人物が実際に子供たちに何かを用意してきたという行為によって実証され、その2つの事柄に一致が見られたために også が用いられている。

(16)・(17) から、感嘆表現の中に også が含まれていても、それは også が特定の感情の表出と関係があるというよりは、その感情が表出する過程が også を用いる理由となっている可能性が指摘できる。また以下のように、感嘆表現の中に også を含む文が先行する文脈なしに示されている例もある。³²

(18) saadant Noget er ogsaa til at bli' halvgal over! (ODS)

〈そのようなことには、本当、頭がちょっとおかしくなってしまうよ!〉

(19) han skal ogsaa have sin næse i alting! (ODS)

〈彼は本当、あらゆることに首を突っ込まずにはいられないのか!〉

ODS にはさらに以下の例文も挙げられている。³³

(20) Jeg siger, gid det var mig selv, der skulde have Bryllup. Det er ogsaa mærkeligt, det kan være saa svært at blive gift. (ODS)

〈結婚式を挙げるのが私だったらなあ、と私は言う。結婚するのがこんなに難しいだなんて本当、奇妙だ〉

(20) では先行する発話内容から、主語である私は結婚をしたいと望んでいるが未婚であることが前提として推測できる。恐らくはこの先行する発話内容に隠された前提に対して、後続する発話内容の一部である「結婚するのがこれほどに難しい」ことがその説明（釈明）として機能するのだろう。つまり自身が結婚できないのは、結婚することが難しいからという事実で説明される事柄のように述べている訳である。したがって (20) において重要なのは、også が含まれる発話が、先行する発話の前提に対する説明として機能していることであり、そのような文

³² 岩崎 (1990: 77) ではドイツ語 auch の心態詞としての用法の記述に以下のような説明がある：III. ③ [平叙文形式の感嘆文に用いられ、陳述内容について話し手の肯定的ないし否定的な驚きの気持ちを反映して、文中でのアクセントなし].

(p) Dieses Abendrot ist auch wirklich herrlich! 〈この夕焼け、じつにすばらしいなあ〉

³³ ODS では (20) の前置きとして、「《3.2.》の説明を参照せよ」という指示書きがある。つまりこの例文における også の機能は、先に見た《3.2.》の説明【何かについての自然な、必然的な原因あるいは説明（釈明）として何かを示す】と関連があるということであろう。

脈があるからこそ、後続する感嘆表現で *også* が用いられているのではないかと
思われる。

また以下の例のように、*også* が罵り言葉の直後に使われているものや、疑問文
もしくは願望を表す文の中で使われているものも挙げられている。³⁴

(21) *fanden også*, at han ikke kan se sig for! (ODS)

〈ああもう本当に、あいつは前が見えないのか!〉

(22) "saa gav jeg ham en lussing" – "ja, hvorfor gjorde du *ogsaa* det?" (ODS)

〈「それで私は彼の頬を叩いた」 – 「そうだね本当、何故そうしたの?」〉

(23) *gid han også* vilde lade være med det! (ODS)

〈本当、彼がそれをやめてくれたらなあ!〉

(21) – (23) において *også* が用いられている理由は説明できないが、それぞれの
例文で表されている感情、怒り (21)、咎め (22)、願望 (23)は、各文で *også* を
省いても、文の形式やその他の語彙で表すことができる感情だと思われる。やはり
også が用いられる理由としては、感情の種類ではなく、それぞれの感情が表出
する過程が問題なのではないだろうか。

ちなみに DDO では《5.》【驚きや遺憾などの表現において強調して使われる】³⁵ に
おいて *også* が感嘆表現で用いられる例を扱っている。

(24) *Jeg er da også* dum, at det overhovedet ikke er faldet mig ind at spørge (DDO)

〈それを質問することを思いつかなかったなんて、私は本当、バカだ〉

またその下位分類には《5.a.》【何かが本当に予想される通りであることを認める
表現において (皮肉として) 使われる】³⁶ という説明がある。

(25) *hvorfor skal I kvinder også* altid være hysteriske og på tværs (DDO)

〈どうして君たち女性は本当、いつもヒステリックで非協力的なんだ〉

以上、*også* が感嘆表現で用いられるという指摘は ODS にも DDO にも見られ
た。Christensen (2006) では *også* は感嘆表現で用いられることは稀ではないか
という主旨の指摘がなされていたが、少なくとも ODS そして DDO の記述によ
れば、*også* が感嘆表現で用いられることがあり得るようである。

³⁴ 岩崎 (1990: 78) ではドイツ語 *auch* の心態詞としての用法の記述に以下のような説明がある：
III. ④ [補足疑問文形式の感嘆文に用いられ、陳述内容についての話し手の怪訝・皮肉・あ
ざけり・不快・怒りなど、概して否定的な気持ちを反映して、文中でのアクセントなし].

(q) *Wieso hast du auch* so etwas getan! 〈なんできみは、そんなにお人好しでいられたんだい?〉

³⁵ *bruges forstærkende i udtryk for overraskelse, ærgrelse el. lign.* (DDO: *også*, 5.)

³⁶ *bruges (ironisk) i udtryk for erkendelse af at noget er ganske som man kunne forvente* (DDO:
også, 5.a.)

3.4. heller

ODS には説明《1.2.》に【ある陳述と（想像されたもしくは直接的に示された）先行する（肯定文の）陳述とを結び付ける（一致させる）ために；とりわけ、さらなる説明的な論拠，譲歩あるいは和らげるような付け加え，保証などの表現において】³⁷ とある。

(26) de var saa artige og stille, - især den gamle Frue, - naa saa gammel var hun jo **heller** ikke. (ODS)

〈彼らはとても行儀がよくそして大人しかった，特にあの年配の夫人は，まあ，彼女はそこまで年をとっていたわけでもないのですけどね〉

先行する文の命題内容

：「特にあの年配の夫人はとても行儀がよくそして大人しかった」

後続する文の命題内容：「彼女はそれほど年配ではなかった」

《1.2.》の説明に沿うならば，先行する文の命題内容に対して，後続する文の命題内容は【和らげるような付け加え】をしていると言えるだろうか。(26)と同様の用法が DDO の《1.b.》【何かの範囲あるいは程度に限度があることを示すために使われる】³⁸ においても言及されている。

(27) Hver gang mosteren talte om læge slog moren det hen. Det var for dyrt. Og så skidt havde hun det **heller** ikke. (DDO)

〈母方の叔母が医者のお話をしたとき，母はお茶を濁した。それはお金がかかりすぎた。それに彼女は（実際）そこまで具合が悪いというわけでもなかった〉

(27) では，直前の 2 文から「母親が医者にかかってもおかしくない状況にあった」ことが分かる。《1.b.》の説明に沿うならば，**heller** が含まれている文はその母親の具合の悪さについての度合いを示していると考えられる。しかし (27) に関しては，Det var for dyrt. という文から「医者にかかるのは高すぎたので，母親は医者にはかかっていなかった」ことが推測できる。そして **heller** を含む文はこの推測に対する説明と解釈できる。その場合，**heller** は用法②と近接するものと考えられる。

したがって **heller** に関しては，ODS も DDO も心態詞的用法に関連する直接的な言及はなかったが，ODS が指摘しているように **heller** には否定文において「～もまた」を表す以外に，også と同様，先行する文（否定文である必要はない）と後続する文を繋ぐ機能があるようだ。また DDO には用法②に近接した例が存

³⁷ for at knytte et udsagn sammen (bringe det i overensstemmelse) med et (tænkt ell. direkte udtrykt) foregaaende udsagn (af positiv art), især i udtr. for en yderligere, forklarende begrundelse, en indrømmelse ell. modererende tilføjelse, en forsikring olgn. (ODS: heller, 1.2)

³⁸ bruges for at udtrykke at der trods alt er en begrænsning i omfanget eller graden af noget (DDO: heller, 1.b.)

在した.³⁹ ただ ODS にも DDO にも heller が心態詞的用法で用いられている分かりやすい例がなかったので、筆者は heller が用法①そして②で用いられている実例がないかどうか、デンマーク語の小説や Korpus DK を用いて検索を試みた。

(28) -Sådan noget havde jeg slet ikke forestillet mig om Dem hr.

-Jamen jeg slog hende heller ikke ihjel alligevel. (FS: 7)

<「そのようなこと [筆者付記：客である男性が自分の妻を殺そうとすること] は、お客様にあつては、私は全く想像したことがございませんでした」－「いやでも実際、私は彼女をやはり殺さなかったのです」>

先行する発話の命題内容

：「私はあなたがそのようなことをするとは想像したことが全くなかった」

応答する発話の命題内容：「私は彼女を殺さなかった」

(29) -Men du arbejder på færgerne?

-Ikke endnu. Jeg skal begynde til februar.

-Jeg mente heller ikke, jeg havde set dig før. (HH1: 29)

<「でもあなたこのフェリーで働いているの?」－「いいえまだです。2月から働き始めます」－「実際、これまでにあなたを見かけたことがないな、と思っていたの」>

先行する発話の命題内容

：「私はまだこのフェリーで働いておらず、2月から働き始める」

応答する発話の命題内容：「私はあなたをこれまでに見かけたことがない」

(28)・(29) では、応答する発話内の heller は、先行する発話の命題内容における正当性を話し手が認め同意し、さらには応答する発話の命題内容が先行する発話の命題内容に対する説明となり得ることを示と考えられる。また Korpus DK には以下の例があった。

(30) Det skal du ikke være ked af. – Det er jeg heller ikke. (Korpus DK)

<「それを君が残念がることはない」－「実際、残念には思いません」>

³⁹ 岩崎 (1990) では、ドイツ語 auch nicht の話法詞としての例 (u) そして心態詞としての例 (v) が示されている。

(r) Ach, du bist noch an der Arbeit? Entschuldige! Ich möchte dich nicht stören. – Du störst mich *auch* gar nicht. <おや、まだ仕事中心かい? ごめんよ。邪魔するつもりはなかったんだ－事実、邪魔なんか全然してないさ> (岩崎: 72)

(s) Er sprach nie von seinen Privatleben und hatte wohl *auch* keines. <彼は、自分の私生活については一度も口にしなかったし、事実、私生活など持っていなかったのだろう> (岩崎: 80)

(31) ”Jeg kan ikke forstå, at vi to kan være søster og bror”, sagde hun tonløst.
 (….) ”Det er vi heller ikke”, sagde han (….) (Korpus DK)

＜「私たちが兄妹でいられるなんて、理解できない」と彼女は抑揚なく
 言った、(….) 「実際、僕らは兄妹じゃない」と彼は言った (….) ＞

(30)・(31) においては、heller が含まれる発話は、単純に先行する発話の命題内容が正しいということを認め同意を示しているだけであり、heller は用法①のみを有すると考えられる。

(28)–(31) から、Andersen (1982)の指摘通り、heller にも心態詞的用法が確認され、også の場合と同様、用法①と②を同時に持つ場合と用法①のみを有する場合があることが分かる。

最後に heller が感情表出の機能を伴う場合についてだが、ODS の説明《2.1.》に【疑問文の形式をとるが、実際には先行する陳述における考え方を否定するような、再度言及するような（論証するような）文で用いられる；特に不満、遺憾、気が進まないことなどの表出として】⁴⁰ とあり、同義語として også が挙げられている。⁴¹

(32) de betragtede ham og hans høje blonde Sønner med den dybeste Skræk (….)
 Hvorledes skulde de heller forstaa Kæmper med lyst Haar og blaa Øjne der kom over Vandet med Skibe, noget de end ikke havde Begreb for. (ODS)
 ＜彼らは、彼と彼の背が高くブロードの髪をした息子たちを、これ以上ないほどの恐怖をもって観察した。(….) 彼らはいったいどうやってブロードの髪と青い目をした大男たちを理解すればいいというのか、その大男たちは船に乗って海を渡ってきたのだ、船とはどんなものかさえも彼らは分かっているのに＞

(33) hvad Rart er der heller ved det Julen uden Juletræ og Fornøielse? (ODS)
 ＜クリスマスツリーも余興もないクリスマスのいったい何が良いのだ?＞

(32)・(33) においては heller を省いたとしても、ほとんど意味の変化は生じないと思われるのだが、DDO では感嘆表現における heller については全く言及されていない。DDO に言及がないことは、もしかすると heller の感情表出の用法こそ現代デンマーク語では稀であるということを示唆しているのかもしれない。感嘆表現に現れる heller については、現段階でこれ以上の考察をすることは難しく、実例を探すことも含めて今後の課題としたい。

⁴⁰ i sætninger, der formelt er spørgende, men reelt nægtende, genoptagende (begrundende) tankegangen i et foregående udsagn; især i utdr. for misfornøjelse, beklagelse, ulyst olgn. (ODS: heller, 2.1)

⁴¹ (32)・(33) では、否定文ではないにもかかわらず heller が用いられているが、それは ODS の説明にあるように形式こそ疑問文であるが、否定的な意味を伴う表現だからであろう。

3.5. まとめ

ODS 及び DDO において også の意味・用法の説明を詳しく確認すると、alså に関しては、その心態詞的用法と思われる用法・使用例に関する言及がある。また heller については、全体的に også に比べ辞書の記述が手薄な感があり、心態詞的用法と思われる用法・使用例に関する直接的な言及はなかった。ODS 及び DDO における også / heller の記述から考察したことを以下にまとめる。

－ også －

- ・alså において用法②が観察できる場合は、同時に用法①も含まれる。
- ・alså においては、用法①が単独で生じる場合がある。
- ・alså が会話の形態以外で用いられている例において、心態詞的用法に近接した使用が確認される。このことは også が本来の副詞から心態詞的用法を発展させていく過程として興味深い例と言える。
- ・alså が感嘆表現の中で用いられる例が指摘されている。しかし特定の感情の表出と結びついているというよりは、その感情が表出するに至った経緯が også が感嘆表現の中で用いられる理由となっているのではないかと推測される。

－ heller －

- ・heller の用法①については ODS でも DDO でも直接的な言及はない。
- ・heller の用法②については ODS の説明で heller の接続副詞としての側面について言及があり、DDO には用法②に近接する例がある。
- ・heller が感嘆表現の中で用いられている例は ODS では数例の言及があるが、DDO では言及がない。
- ・Korpus DK やデンマーク語の小説には心態詞的用法を有する heller が含まれる例に基づくならば、heller にも用法①と②が同時に含まれる場合と、用法①が単独で生じる場合とがあることが分かった。

4. også / heller が心態詞として使用されている例を用いたさらなる考察

ここまで også / heller の心態詞的用法に関して学術論文や辞書の記述を確認してきたが、以下では筆者がデンマーク人研究者たちに実際の例文を提示し得た見をもとに、alså / heller の心態詞的用法についてさらに考察をしていきたい。⁴²

⁴² ここでのデンマーク人研究者は筆者が 2016 年夏に実際に også / heller の用法について話し合った、Tanya Karoli Christensen 氏、Eva Skafte Jensen 氏そして Lars Heltoft 氏である。

4.1. også と egentlig そして faktisk の違い

これまでの記述において、筆者は også の心態詞的用法の日本語訳として「実際」や「本当」を用いてきた。筆者は også の心態詞的用法に興味を抱いて以来、「本当は、本来ならば」と訳すことがある egentlig や「実際」と訳すことがある faktisk と også の違いについて考えていた。ここでは筆者がデンマーク語研究者に også を含む例文について質問をした事柄とそれに対する回答を中心に報告をしたい。

(34) A: Jeg vil nok prøve at finde noget i Næstved.

B: Det er også en god by. (HH2: 147)⁴³

<A: Næstved で何か [筆者付記: 住むところ] を見つけてみようかなと思っているんだ。B: Næstved は実際/本当、良い町だもんね>

(34) において筆者が疑問に思った点は、B の発話の命題内容が「Næstved は良い町だ」という肯定的なものであるのだから、敢えて også を用いなくとも相手に対して同調を示すことができるのではないかということである。つまり (34) と次の (35) に意味の違いがあるかどうかということである。

(35) A: Jeg vil nok prøve at finde noget i Næstved.

B: Det er en god by.

デンマーク人研究者たちの意見を総合すると、(35) では A の発話に対する「同意の表明」が文法的にはなされていない、という。したがって A と B の発話の関係性は、言語を用いては示されておらず、双方の発話の関係性は会話の参加者が自身で構成しなければならない。そしてその関係性が「同意/同意した上での説明」であるとは示されていないので、以下のような会話が成立する。

(36) A: Jeg vil nok prøve at finde noget i Næstved.

B: Det er en trist by.

<A: Næstved で何か [筆者付記: 住むところ] を見つけてみようかなと思っているんだ。B: Næstved は何もない町なのに>

(36) では、B の発話内容が A の発話内容への「同意/同意した上での説明」であるとは、言語的にどこにも示されていない。したがってこの場合は、B の発話の意図を A は自分で判断しなければならない。⁴⁴ したがって、(36) に også を付け加えると、その発話は意味を為さないものとなるという。

⁴³ (34) – (39) のうち実際の例は (34) のみである。(35) – (39) は筆者が意味の違いを探るために også を省くまたは også を別の副詞と入れ替えるなどして作成したものである。また説明の便宜上、A と B の会話という風に筆者による変更が加えられている。

⁴⁴ このように文法的な/語彙的な明示はないが、その発話の含意する意味を聞き手/受け手が読み取る必要がある場合には、問題の性質は語用論的な性格が強くなると考えられ、(34) のように også による「同意の表明」が為されている場合とは若干異なるであろう。したがって心態詞とはやはり文法範疇の一部として捉えられるべき言語現象なのではないかと思われる。

(37) A: Jeg vil nok prøve at finde noget i Næstved.

B: *Det er også en trist by.

<A: Næstved で何か [筆者付記: 住むところ] を見つけてみようかなと思
っているんだ. *B: Næstved は実際/本当何もない町なのに>

それでは også を egentlig にするとどのような意味の変化が生じるのだろうか.

(38) A: Jeg vil nok prøve at finde noget i Næstved.

B: Det er egentlig en god by.

<A: Næstved で何か [筆者付記: 住むところ] を見つけてみようかなと思
っているんだ. B: Næstved は (最初はどうかと思ったけれど) 良い町です>

(38) では egentlig により, B が自身の発話の命題内容 (= 「Næstved は良い町
である」) に対して迷いがあったことが示唆されるという. そして B が熟考した
結果, Næstved は良い町だ, という結論に至り, 元々存在した迷いは打ち消され
たことを示すという. (34) とは異なり, egentlig を用いた場合は, 先行する発話
との関連性が問題となるのではなく, egentlig が含まれる発話自体の命題内容に
関して話し手自身が持つ迷いを打ち消す役割を果たすということである.

それでは faktisk を用いると意味はどのように変化するのであろうか.

(39) A: Jeg vil nok prøve at finde noget i Næstved.

B: Det er faktisk en god by.

<A: Næstved で何か [筆者付記: 住むところ] を見つけてみようかなと思
っているんだ. B: Næstved は実際は良い町です>

(39) における faktisk も, 「Næstved は良い町である」ことについての迷いが
あることを示唆するという. しかし, その迷いは faktisk の場合には相手側もしくは
は世間などの第3者に存在するという. つまり, 「あなたは/皆は, Næstved が
良い町であることに疑問を抱いているようだが, 実際は, Næstved は良い町だ」
と述べることで, 相手側に存在する迷いを打ち消すという.⁴⁵ (34) とは異なり,
faktisk を用いた場合も先行する発話との関連性が問題となるのではなく, faktisk
が含まれる発話自体の命題内容に関して相手/第3者が持つ迷いを打ち消す役割が
あるということである.

(34) – (39) からわかったことは, 心態詞としての også はあくまでも先行する
発話内容と også 自身が含まれる発話内容とを関連づける機能を有するのであ
って, その点では egentlig や faktisk とは大きく異なるということである.

⁴⁵ (39) の faktisk の訳語として, 「実際は」とあるが, 田 他 (1998: 388) によれば, 「実際は」
は, 「世間の評判や評価・予想・うわべとは異なる事実を述べる場合に使われる」という. ま
た, デンマーク語の副詞 egentlig と faktisk については, Jensen (2006) を参照されたい.

4.2. også が他の心態詞と用いられている一例

også が心態詞的用法で用いられているのかどうかを見極めるにあたって、非常に困難だったものに、også がその他の心態詞とともに用いられている場合があった。ここでは、også が別の心態詞が共に使われている例に着目してみたい。

(40) A: Hvorfor kan du ikke lide hende?

B: Det kan jeg da også godt. (HH: 188)⁴⁶

<A: どうして君は彼女のことが好きじゃないの?>

(40) では、心態詞 da そして også、さらに焦点化詞の godt が用いられている。⁴⁷ (40) における da, også そして godt が示している機能を理解するため、まずは A の発話に着目したい。hvorfor で始まる疑問文には、通常 fordi を用いて理由を答えるのが一般的だが、B の発話ではその理由が述べられているのではない。hvorfor などの疑問詞で始まる疑問文は特定疑問文と呼ばれるが、ja-nej で答えられる全体疑問文のように命題内容の真偽を問うのではなく、疑問詞で示される意味内容が質問の焦点となるものである。⁴⁸ したがって命題内容の真偽については、話し手は一定の判断をすでに行なっており、それに付随する情報について尋ねていると考えられる。つまりは Hvorfor kan du ikke lide hende? という疑問文が発話される前提として、話し手自身が du kan ikke lide hende <あなたは彼女のことが好きではない> という命題内容を真としていることが想定される。この前提に着目することが、一連の心態詞を解釈していく上で必要な要素となるようだ。

まずは godt が用いられている理由であるが、A が発話している疑問文の前提が否定を含んだ命題内容であることに関連する。この否定を含む命題内容の否定、つまりは二重否定をすることが godt の役割だという。したがって (40) における B の発話を、goodt の役割にのみ焦点を置いて無理やり訳すと、「(あなたは私が彼女のことが好きではないことを前提にしているようだが、好きでないということではなく、) 私は彼女のことが好きです」となるであろうか。

次に også が用いられている背景について扱う。デンマーク語の心態詞の機能を説明する際に、ポリフォニー理論を用いる場合があるが、(40) における også の役割を理解するためには、このポリフォニー理論に沿って A の発話する疑問文の前提に 2 つの視点が内在することを考える必要がある。⁴⁹

⁴⁶ (40) においても説明の便宜上、A と B の会話という風に筆者による変更が加えられている。またここでは B の発話について論じるため A の発話のみを日本語にしておく。

⁴⁷ 心態詞としての da については大辺・新谷・Paludan-Müller (2015: 101-103) を、焦点化詞 godt については大辺・新谷・Paludan-Müller (2015: 135-136) を参照。

⁴⁸ 間瀬 (2005: 30)。

⁴⁹ Therkelsen (2004) の説明によれば、ポリフォニー理論では、あるテキストには常に複数の声が存在する、ということを出発点としているという。しかもそれはある程度の長さや量を伴っ

(40a) Du kan ikke lide hende.

視点1：Du kan lide hende. **視点2**：Du kan ikke lide hende.

そして (40) の også は、上記の視点1に関わるものであろうということである。ただし以下の会話はデンマーク語としては不自然なものになるという。

? (40b) A: Du kan lide hende.

B: Det kan jeg også godt.

しかし A の発話に jeg tror / jeg håber を付け加えると会話は成立するという。

(40c) A: Jeg tror, du kan lide hende. / Jeg håber, du kan lide hende.

B: Det kan jeg også godt.

したがって (40) で også が関連しているのは、A が発話している疑問文の前提に内在する視点から派生した A の架空の発話内容に対してであるようだ。故に (40) における B の発話を、godt と også の役割に焦点を置いて無理やり訳すと、「(あなたは私が彼女のことを好きではないことを前提にしているようだ、にもかかわらずあなたは私が彼女のことを好きだとも思っているようだ／と同時にあなたは私に彼女のことを好きであってほしいと望んでいるようだ、好きでないということはないし、あなたの予想通りで／あなたの期待通りで、) 私は彼女のことを好きです」となるであろうか。godt が関連している事柄と、også が関連している事柄が違っているので非常に難解である。

最後に da が用いられている理由であるが、これも A の発話における前提に関わる。B は発話中に da を用いることで① A の発話内容の前提を否定し、なおかつ② B が否定していること、つまり「B が彼女のことを好きでない、ということはないこと」は A にとって既知のものである、ということを知っているという。

したがって (40) における B の発話を、godt, også そして da の役割に焦点を置いて無理やり訳すと、「(あなたは私が彼女のことを好きではないことを前提にしているようだ、にもかかわらずあなたは私が彼女のことを好きだとも思っているようだ／同時にあなたは私に彼女のことを好きであってほしいと望んでいるようだ、好きでないということはないし、あなたの予想通りで／あなたの期待通りで、) 私は彼女のことを好きです、(しかしあなたはそのことを知っているじゃないですか!）」となるだろうか。

た文学テキストなどにだけ該当することではなく、単独の発話や文であってもそのように考えられるということである。したがって、以下の文には2つの視点が存在するという。

(t) Denne væg er ikke hvid. (Therkelsen: 81) <この壁は白くない>

視点1：væggen er hvid <壁は白い> **視点2**：væggen er ikke hvid <壁は白くない>

2つの視点があるからこそ以下のような文が後続する文としてどちらも成立するのだという。

(u) og det er min nabo ked af <そのこと (壁が白くないこと) を私の隣人は残念がっている>

(v) men det tror min nabo <しかし私の隣人はそのように (壁が白いと) 思っている>

4.3. *Løgneren* における *også* / *heller* の心態詞的用法がもたらす効果

ここでは、デンマーク人作家 Martin A. Hansen が 1950 年に発表した *Løgneren* 『嘘つき』という作品において、*også* / *heller* が心態詞的用法で用いられている例に着目し、それが作品の主人公である Johannes Vig の人間性を描写する際にどのような効果をもたらすのか考察してみたい。⁵⁰

以下の 2 例は *Løgneren* こと Johannes Vig の発言において *også* と *heller* が用いられている例であり、彼が *også* と *heller* を自身の発言中に用いることで、どのような「嘘」がつかれているのか、ということを検討してみたい。

Martin A. Hansen は、作品中わざと引用符を用いていないのだが、ここでは問題となる箇所を以下のように会話として取り出して記述する。

(41) A: Enten har du løjet for mig, eller ogsaa vil du ikke laane mig den Kæde!

B: Saa har jeg nok løjet, Annemari.

A: Nu maa jeg gaa.

B: Du har ogsaa været her længe. Maaske du har Gæster hjemme.⁵¹

まず (41) における B の最初のセリフの不自然さに注目したい。普通、本人が嘘をついたかどうかということには、*nok* を使う余地などないはずである。つまり Johannes Vig が嘘をついたかどうかということは、彼自身にとっては明らかなことであるにもかかわらず、彼は「きっと私は嘘をついたのだろう」という言い方をして、ある意味 Annemari をはぐらかしている。先行する文脈において、Johannes Vig は Annemari に対して何度もはぐらかすまたはからかうなどしており、ついに Annemari は *nu maa jeg gaa* と発言するのである。このセリフの直接的な意味は、「私は（なんらかの用事などがあって）もう行かなくてはならない（この場を去らざるを得ない）」というものであるが、先行する文脈を踏まえる

⁵⁰ *Løgneren* は Sandø（真実の島）と呼ばれる島を舞台とし、教師兼牧師の助手である Johannes Vig を主人公とした物語である。主人公は自分の周囲に対して表面上は世話好きな人物として振る舞うが、実際には本心を周囲に打ち明けることなく接している。また主人公は Annemari という若い女性への想いを彼女に対しても自身に対しても偽っている。つまり *Løgneren* というのは他ならぬ Johannes Vig のことだと分かるような物語となっている。

⁵¹ 以下に示すのが実際の例文である。

(w) Enten har du løjet for mig, eller ogsaa vil du ikke laane mig den Kæde! / Saa har jeg nok løjet, Annemari, sagde jeg. / Nu maa jeg gaa, sagde hun. / Du har ogsaa været her længe, sagde jeg, maaske du har Gæster hjemme. (MH: 16)

〈あなたが私に嘘をついたか、あなたは私にそのネックレスを貸したくないのかどちらかね！／それならきっと私は君に嘘をついたのだろう、Annemari、と私は言った。／私、もう行かないと、と彼女は言った。／君は実際ここに長くいたからな、と私は言った、もしかしたら君は自宅にゲストがいるのかな〉

(w) は、Annemari が Johannes Vig の住まいへ訪ねてきた場面における 2 人のやり取りである。(41) の A は Annemari、B は Johannes Vig である。

と、いわゆる含意として「あなたみたいな人とはもう一緒にいたくないわ」という効果を有すると考えられる。しかしこれに対する Johannes Vig のセリフを見ると、Annemari のセリフにおける含意には反応せず、直接的な意味にのみ反応していることが分かる。デンマーク人研究者たちの意見によれば、Johannes Vig は Annemari のセリフの含意に気付いているにもかかわらず、その含意に敢えて反応を示していないことから、この会話のやり取りが表面的で建前上のものであることが読者には理解できるようである。つまりは Johannes Vig は、Annemari が彼自身に愛想を尽かせてこの場を去ることに気付いているにもかかわらず、会話では、まるでその本当の理由を覆い隠すかのようなやり取りがなされているのである。

次に heller を含む例を見ていきたい。この箇所も実際に発話された部分だけを用いて再構成する。

(42) A: Er du stadig tilfreds med at være her?

B: Jo, jeg er tilfreds. (…)

A: Jeg tror ikke du er rigtig tilfreds, Elna.

B: Nej, det er jeg heller ikke.

A: Hvad er der saa i Vejen, min Pige?

B: …

A: Ja, det kommer jo heller ikke mig ved, Elna.⁵²

最初の heller については、A の発話における命題内容 (= 「B は満足はしていない」) を、B が自身の発話で認め同意を示しているものと考えられる。

次に 2 番目の heller についてであるが、デンマーク人研究者たちにこの箇所を提示して問うた結果、Elna は Johannes Vig の ”Hvad er der saa i Vejen, min Pige?” という質問に対して沈黙をしており、その沈黙に対して Elna が自身の発話で heller を用いていると分かった。そのように考えて再読すると、B が沈黙しているその間に、A は口には出さず、ある思考をしていることが分かる。⁵³ この思考か

⁵² 以下に示すのが実際の例文である。

(x) Er du stadig tilfreds med at være her? / Jo, jeg er tilfreds, siger hun. (…)/ Jeg tror ikke du er rigtig tilfreds, Elna. / Nej, det er jeg heller ikke. / Hvad er der saa i Vejen, min Pige? / Naa, for Pokker. Var nu din Mund, tænker jeg, ellers faar du en-to-tre en Bunke Ulejlighed. / Ja, det kommer jo heller ikke mig ved, Elna. (MH: 60)

<君は今でもここにいることに満足しているのか? / ええ、満足しています、と彼女は言う。(…)/ 私が思うに、君は本当に満足などしていない、Elna. / ええ、私は実際満足していません。 / それじゃあ、一体何が問題なんだい? / まったく。自分の言葉に気をつける、と私は考える、さもなくばお前はまた面倒なことを背負い込むことになる。 / そうだね、私には実際関係のないことだ、Elna>

(42) では A は宿屋で働く Elna という女性を指し、B は Johannes Vig である。

⁵³ (x) の Naa, for Pokker. Var nu din Mund, tænker jeg, ellers faar du en-to-tre en Bunke Ulejlighed. という部分である。

ら、Bは実際には「自分は関わらないほうがいい、面倒を背負い込むだけだから」と考えていることが読者には分かるのだが、実際の会話でBがそれを口にすることはない。実際にBが口にするのは”Ja, det kommer jo heller ikke mig ved, Elna.”〈そうだね、私には実際関係のないことだ、Elna〉である。

つまり heller は Elna の沈黙に対しての同意を表し、heller が含まれる発話の命題内容はその同意の理由を述べていると考えられる。しかし B である Johannes Vig が実際には Elna の問題に関わると厄介なことになる、という風に考えていることを知る読者にすれば、彼が発話内で heller を用いて示している「同意」もそしてその同意の「理由」も løgn つまり嘘であることが分かるのである。

(41) や (42) では、også / heller を含む例が、実際に *Løgneren* という物語の核となる部分である Johannes Vig の「嘘つき」という性質を描写する上で非常に上手く機能していることが確認できると言えるであろう。

5. おわりに

本稿では、også / heller における心態詞的用法について様々な側面から考察してきたが、1つには Andersen (1982) や Christensen (2006) で示されている også / heller の用法①と用法②について、ODS 及び DDO の記述そして実際の例文を手がかりに、用法①と用法②が同時に生じる場合と、用法①が単独で生じる場合とがあることがわかった。また1つには、Christensen (2006) でその存在が疑われていた også の感嘆表現における用法も全く皆無ということではないことがわかった。さらには、筆者自身にとって理解が困難であった også と egentlig や faktisk の違い、また også が別の心態詞と共に現れている場合についても、デンマーク人研究者たちからの助言をもとに説明を試みた。最後には、også / heller が心態詞的用法で用いられている文を正しく理解することが、実際の文学作品を読解・解釈する際にも有益な場合があることを示した。

ただ本稿では også / heller の語順そして発音に関することについてはほとんど扱うことができなかった。⁵⁴ 語順に関しては、その他の心態詞や副詞と共に用いられる場合にどのような相互語順が可能かということについて問題になるのであるが、これはまた別の機会にその他の心態詞と共に取り上げたい。また発音に関してだが、近年心態詞的な用法の場合に発音の短化が指摘されている egentlig や faktisk のように、også や heller (ikke)にもそのような傾向があるのかどうかとい

⁵⁴ 文中において中域副詞の位置に置かれ心態詞として用いられている også / heller に強勢が置かれるかどうかについては、デンマーク人講師の Martin Paludan-Müller 氏に確認した結果、også の場合は (21) と (40) を除いて文中アクセントは置かれえないとのことであった。また heller に関しては、全ての例文において弱強勢で発音されるということであった。

うことも非常に興味深い問題である。⁵⁵ どちらの問題も今後の研究動向などを注視していきたい。

最後に、*også* / *heller* における相手の発話内容を認め同意を示す機能というのは、*da* や *nu*, *altså*, *ellers* などが持つ相手の意見に対して反論をする機能に比べて、日本語を母語とするデンマーク語学習者・話者にとっては、比較的使い易いものではないかと思われる。また日本語訳としてどれだけ自然な訳を施すかという問題とは別に、デンマーク語の心態詞がどのような働きをしているかということについては、やはりできるだけ正確な理解をする必要があるように思われる。そうでなければ、デンマーク語で書かれた文学作品の非常に細微なニュアンスなどを取りこぼすまたは無視するような解釈・読解となってしまうだろう。今後も少しずつではあるが、心態詞の説明を試みたいと考える。

Om brugen af de danske adverbier *også* og *heller* som modalpartikler

Resumé

Rie Obe

Artiklen handler om det danske adverbium *også* og dets negerende variant *heller*, især med henblik på deres brug som modalpartikel.

I artiklens anden del (under 2.) har jeg gennemgået de hidtidige antagelser om *også* / *heller* som modalpartikler, bl.a. Andersen (1982). På baggrund af disse antagelser har jeg videre gennemgået beskrivelser af *også* / *heller* i ODS og DDO (under 3.) Gennemgangen af beskrivelsen af *også* har ført mig til at modificere Andersens beskrivelse. I eksempel (6) og (7) kan man iagttagte, at Andersens forklaring stemmer, men i (8) – (10) kan man iagttagte, at *også* i Bs ytring kun udtrykker bekræftelse af / enighed i / støtte til det propositionelle indhold af As ytring. Således er det bedst at man skelner mellem de to tilfælde: det tilfælde, hvor *også* i Bs ytring kun har en bekræftelsesfunktion, og det tilfælde, hvor *også* har en sådan bekræftelsesfunktion og

⁵⁵ Heegaard & Mortensen (2014) では faktisk が中域副詞の位置に現れ、心態詞的用法で用いられる場合には、2音節語ではなく強強勢がある第1音節の母音のみを発音する1音節語として発音される傾向があることが指摘されており、また Heegaard (2015) では egentlig が同様の条件下において強強勢がある第1音節の母音のみを発音する1音節語として発音される傾向があることが報告されている。

samtidig en forklaringsfunktion.

Til forskel fra *også* har hverken ODS eller DDO eksempler, hvor *heller* har en bekræftelsesfunktion, mens ODS nævner om *hellers* kohæusive funktion som adverbium, og DDO nævner et eksempel, hvor *heller* formodentlig har en forklaringsfunktion. Imidlertid kan man relativt let finde eksempler i Korpus DK og danske noveller, hvor *heller* fungerer som modalpartikel, jf. (28) – (31). Den ovennævnte skelnen mellem to tilfælde gælder også for *heller*.

Jeg har også fokuseret på det tilfælde, hvor *også* / *heller* bruges emotivt. Der findes rigelige eksempler med *også* i ODS og DDO, men kun få med *heller*. Af eksempler som (16) – (23) og (32) – (33) fremgår det, at *også* / *heller* forbindes med forskellige typer følelser. Så vidt jeg har gennemgået eksemplerne i ODS, ser det ud til, at brugen af *også* i emotive sætninger som (16) og (17) kan skyldes, at der findes bekræftelses- / forklaringsrelationer mellem den foregående sætning og den pågældende sætning med *også*.

I artiklens fjerde del (under 4.) har jeg arbejdet med tre temaer, som forhåbentlig vil være til hjælp for japanere for bedre at forstå *også* / *hellers* brug som modalpartikel. Først har jeg beskrevet, hvad slags forskel der opstår, når man udskifter *også* med *egentlig* og *faktisk*. Årsagen til denne undersøgelse er, at disse tre adverbier kan oversættes med japanske ord, som ligner hinanden, fx *jissaiwa*, *hontowa*. Herefter har jeg forklaret sådan et tilfælde som (40), hvor flere forskellige modalpartikler bruges på en gang. Til sidst har jeg nævnt to eksempler i Martin A. Hansens *Løgneren*, hvor ytringerne med *også* / *heller* som modalpartikel spiller en rolle i skildringen af Johannes Vigs personlighed.

Artiklen afrundes med at understrege vigtigheden af en mere grundig forklaring på danske modalpartikler for bedre at forstå dansk, analysere danske litterære tekster og undervise i dansk.

参 考 文 献

- Andersen, Torben. 1982. "Modalpartikler og deres funktion i dansk", *Danske Studier* 1982, 86-95. København: Akademisk Forlag.
- Christensen, Tanya Karoli. 2006. *Hyperparadigmer. En undersøgelse af paradigmatiske samspil i danske modussystemer*. Ph.d.-afhandling. Roskilde: Institut for Kultur og Identitet, Roskilde Universitet.
- Fischer-Hansen, Barbara & Ann Kledal. 1994. *Grammatikken – håndbog i dansk grammatik for udlændinge*. København: Special-pædagogisk forlag.

- Hansen, Erik og Lars Heltoft. 2011. *Grammatik over det Danske Sprog I-III*. Odense: Det Danske Sprog- og Litteraturselskab, Syddansk Universitetsforlag. (GDS と略す)
- Heegaard, Jan. 2015. “Ordvarighed og grammatisk og pragmatisk funktion. Tilfældet *egentlig*”, *Nydanske Sprogstudier NyS* 49, 61-97. København: Dansk Sprognævn.
- Heegaard, Jan & Janus Mortensen. 2014. “Fonetisk reduktion og kommunikative kontraster: Tilfældet *faktisk*”, *Ny forskning i grammatik* 21, 87-101. Odense: Institut for Sprog og Kommunikation, Syddansk Universitet.
- Jacobsen, Henrik Galberg 編・間瀬英夫訳・注. 2005. 「デンマーク語文法術語集 - デンマーク国立国語審議会・研究所が薦める術語 -」. 間瀬英夫編著訳. 『デンマーク語学ハンドブック - デンマーク語文法術語集 - , -デンマーク語音声表記のための音声記号 -』, 1-98. 大阪：大阪外国語大学.
- Jensen, Eva Skafte. 2000 (upubliceret). *DANSKE SÆTNINGSADVERBIALER OG TOPOLOGI I DIAKRON BELYSNING*. Ph.d.-afhandling i dansk grammatik ved Institut for Nordisk Filologi, KU.
- 間瀬英夫. 1988. 「デンマーク語の否定辞 IKKE の叙法的用法」, *IDUN VIII*, 33-54.
- 大辺理恵・新谷俊裕・Martin Paludan-Müller. 2015. 「デンマーク語心態詞の研究」, *IDUN - 北欧研究 - 21 号*, 97-159.
- 新谷俊裕・Thomas Breck Pedersen・大辺理恵. 2014. 『大阪大学外国語学部 世界の言語シリーズ 10 デンマーク語』. 大阪：大阪大学出版会.
- Therkelsen, Rita. 2004. “Polyfoni som sproglig begrebsramme og som redskab i tekstanalysen”, *Sproglig polyfoni Arbejdsrapporter 1*, 79-109. Roskilde: Institut for Kultur og Identitet, Roskilde Universitet.

辞書／語彙集

- 田 忠魁／泉原省二／金 相順編著. 2002 (1998). 『類義語使い分け辞典 - 日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する -』. 研究社：東京.
- 飛田良文・浅田秀子. 2014 (1994). 『現代副詞用法辞典』. 東京：東京堂出版.
- 岩崎英二郎編. 1998. 『ドイツ語副詞辞典』. 東京：白水社.
- 新谷俊裕・間瀬英夫. 2003. 『音声記号習得および音声記号読み替え練習のためのデンマーク語基礎語彙集 - Molbæk Hansen 方式から改良 Dania 式発音記号へ -』. 大阪：大阪外国語大学.

インターネット上の辞書／語彙集

DDO = Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. 2003 - 2016. *Den Danske Ordbog* (<http://ordnet.dk/ddo>).

ODS = Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. 1975 (1922). *Ordbog over det danske Sprog* (<http://ordnet.dk/ods>).

独習コンテンツ・デンマーク語＝大阪大学 世界言語研究センター. 2009. 『高度外国語教育全国配信システムプロジェクト:デンマーク語独習コンテンツ』 (<http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/dan/index.html>) .

例文出典

FS = Søborg, Finn. 1976 (1966). *Ventesal for ikke-rygere*. Rasmus Navers Forlag: København.

HH1 = Helle, Helle. 2012 (2005). *Rødby-Puttgarden*. Samleren: København.

HH2 = Helle, Helle. 2015 (2011). *Det burde skrives i nutid*. Samleren: København.

MH = Hansen, Martin A. 1950. *Løgneren*. Gyldendal: København.